

アドヴェント 待つことを学ぶ

中 道 基 夫

電気製品やコンピュータなどが壊れたり、使い方が分からない時にメーカーのサービスセンターに電話する時があります。決まって「ただいま回線が混んでいます。しばらくお待ちください。もしくはもう一度おかけ直してください」という自動音声が届ってきます。無機質な声で繰り返される「お待ちください」という声を聞きながら、もう少し待とうか、それとももう一度おかけ直そうかと思案します。

待つこと、待たされることがわたしたちの生活の中にあります。だいたいの場合その待つことにはあまり意味がないように思ってしまう。スーパーのレジの前、銀行の窓口、信号、電車、病院の待合室で、わたしたちは待つことによって無駄な時間を過ごしていると感じます。それは数分のこと、もしくは数秒のことであっても、なにか重要なものを失ってしまったような思いになります。できるだけ早く、できるだけ待つことなしに物事を済ませたいと願うようになりました。そう願うだけではなく、少しでも待たされるとイライラしてしまうのはどうしてでしょうか。

わたしたちはすぐに結果を見ようとします。なにか行動を起こしたときに、その効果をすぐに見たいと思います。それはすべてを自分でコントロールしたいという思いの表れではないでしょうか。しかし、はやく成長するものははやく枯れていくものです。成長は時間を必要とします。

待つこととは、成長へのあきらめではなく、成長や変化への信頼です。待つことによって時間を失っているわけではありません。むしろ意識的に待つことによってたえず先の結果ばかりを追い求めることで失ってしまった「今」を取り戻すことができるのではないのでしょうか。待つことは、様々な困難な状況にあっても、ぶれることなく自分があるべき場所に踏みとどまる力を与えてくれます。そして自分自身を信頼し、現実の自分を愛することができる力を養ってくれます。

クリスマスの前のおよそ24日間をアドヴェント（待降節）といいます。イエス・キリストの誕生を待つときです。クリスマスを前にして、特に慌ただしい時を過ごします。そういう季節であるからこそ、「待つ」ことの意味や力を発見してみたいかがでしょうか。

（神学部准教授）